

部 : I

書名 : 森鷗外の『智恵袋』

著者 : 小堀桂一郎訳・解説

出版社 : 講談社学術文庫

本文 : (約409字)

本書は、ドイツのクニッゲの『交際法』を、鷗外が翻訳し、「時事新報」「二六新報」に連載したものである。翻訳といっても、かなり鷗外の書き足しがある。格言集として優れた書である。以下にいくつか引用し、紹介する。日の光を藉(か)りて照る大いなる月たらんよりは、自ら光を放つ小き燈火(ともしび)たれ。人の我を信ずるは、我先(ま)づ自ら信ずればなり。人と約して時を愆(あやま)らざるが如きは、瑣細(ささい)の事のやうなれども、久しく行ひて怠(おこた)らずば、これのみにても重き信任を得べきものぞ。食色の楽(たのしみ)、利欲を刺激する楽(たのしみ)等は、これを屢々(しばしば)して身を傷(やぶ)り、これを久(ひさし)うして心を害(そこな)ふ。終(つひ)に文学美術の受用の永遠なるに若(し)かず。

趣味やレジャーをやり尽くして、結局勉強が一番面白いと言った人の話を聞いたことがあるが、最終的に人は学問、文学、芸術におもむくのであろうか。

書名 : 万葉語誌

著者 : 多田一臣 編

出版社　：　筑摩選書

本文　　：　（約399字）

作物がたくさん実り、食べ「飽き」るので秋、地中で少しずつ生命力が「増ゆ（え）」るので冬、生命力がみなぎってつぼみが「張る」ので春、では夏は？

春と秋はどちらが優れているか。いわゆる春秋優劣の争いである。「源氏物語」では、紫上が春に軍配を上げている。ところが、「万葉集」には秋の歌が多い。額田王は秋に軍配を上げている。奈良時代の人々は秋好きが多かったようだ。どれだけ見ても満足できない意の「見れど飽かぬ」は、もともと吉野讚美に使われた。吉野に天武天皇の離宮があった。それを讃える柿本人麻呂の歌。〈見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまた還り見む〉

本書には日本語の成立を知る上で興味深い話がいろいろ載っているが、時間帯の呼び方も面白い。昼は「あさ」「ひる」「ゆふ」の三分区。対して、夜は「ゆふべ」「よひ」「よなか」「あかとき」「あした」の五区分。夜の方が細かい。奈良の人々は夜好きだったのだろうか。

部　　：　Ⅱ

書名　　：　三四郎

著者　　：　夏目漱石

出版社 :

本文 : (約441字)

九州から東京に出て、大学生活を始めた三四郎が、学問やほのかな恋を経験し、精神的な成長をしていく、というのが『三四郎』のおおざっぱなあらすじである。

前期三部作の筆頭である『三四郎』では、執筆当時四十代の漱石をなぞらえたような広田先生と、大学生の頃の漱石をなぞらえたような三四郎との交流が一つの軸になっている。そういう意味では後期三部作の『こころ』の先生と私の関係に似ている。外国にならって強国への道を突き進む日本は、その裏で日本文化を徐々に失っていく。このことに対する危機感
は漱石の一貫したテーマだが、『三四郎』の広田先生にもこれを語らせている。

九州から出てきた三四郎は九州の女のように肌が小麦色に焼けた女性が好みのようだ。大学の池の畔で美彌子に出会うシーンはとりわけ有名だが、美彌子に惹かれたのも肌が小麦色だったからである。

『三四郎』で印象的なのは広田先生が夢で会った女のことを学生に話す場面だ。「その時僕が女に、あなたは画(え)だと云うと、女が僕に、あなたは詩だと云った」は名セリフだ。

書名 : 果てしなき流れの果に

著者 : 小松左京

出版社 :

本文 : (約522字)

よい作品には魅力的な女性が欠かせない。本書にも佐世子というチャームで不思議なヒロインが出てくる。

解説で大原まり子が、佐世子は『ファウスト』に登場するグレートヘンに似ていると言っているが、同感だ。

野々村が、何だか途轍(とてつ)もなく深遠な謎を解明しようと、たったひとりで、ある意味「精神的」な大冒険に出かけたことを悟って、佐世子は誰とも結婚せずに待ち続ける。思わず、福永武彦の『草の花』に登場する千枝子と比較してしまった。『草の花』の汐見は、到底実現かなわぬ理想郷への、まさに精神的な旅の途上で、待つ人もなく、ひとり寂しく死んでいった。汐見がいつか精神の旅を終えて現実生活に戻るとは思えなかった千枝子は、非凡ではないがすぐ近くにいてくれる人を選んだ。

ところが、佐世子は違う。彼女がお寺に生まれ、もともと神秘的な力を持っていたせいもあるが、大切なことがはっきり見えるのだ。野々村が失踪する夜も、発掘調査のため出張していた野々村のホテルに飛行機で飛んできた。平気で「ちょっと顔が見たくなったの」と言っていて、微笑んでいる。そして、彼が消えてしまうこともわかっていた。でも、いつか必ず帰ってくることも。それにしても、半世紀以上待てるという腹の据わり方には脱帽である。

書名 : 春の城

著者 : 阿川弘之

出版社 :

本文 : (約542字)

海軍に憧れていた耕二は大学が繰り上げ卒業になると、希望に燃えて佐世保に向かった。白波を立てて駆け巡る軍艦の上で訓練に明け暮れ、国難を乗り越えるために力を尽くしたいと率直に思っていたのだ。しかし訓練が終了した耕二は、大学で漢文学を学んだことが買われて、中国から発信される暗号を解読する特務班に配属され、毎日電車で霞ヶ関に通勤することになった。

中国の「青密(せいみつ)」という暗号は時代遅れで、暗号解読の基本を習得した耕二に解けないものは一つもなく、気楽な毎日であった。

しかし、ほどなく中国が暗号を「平仄密(へいそくみつ)」という高度なものに変更すると、耕二には完全にお手上げであった。この暗号を解くため何ヶ月も悪戦苦闘する耕二の姿は、本書中盤でもっとも読者が夢中になるところであろう。

耕二が同僚たちと懸命に暗号解読しているうちに戦局は厳しさを増す。同僚も一人二人と軍艦に通信兵として派遣され、そして海に沈んでいった。

ついに「平仄密(へいそくみつ)」を解読しおわったころ、耕二は上海に配属される。さらに上海から漢口(かんこう)に転属した耕二が、アメリカのB29がいつどこに何機で爆撃に来るかまで事前に掌握できるようになったとき、日本はポツダム宣言を受諾した。

その四日前、広島駅付近を歩いていた智恵子が見上げると、B29の落とした落下傘が見えた。

書名 : ゴリオ爺さん

著者 : バルザック

出版社 :

本文 : (約616字)

製麺業者のゴリオは、商才と努力で巨万の富を築きあげ、溺愛している二人の娘に所有する資産の大半を持参金として与え、一方は貴族、一方はブルジョアに嫁がせる。

ブルジョアに嫁いだ方の娘デルフィーヌは、貴族たちのサロンに出入りしたいと切望していた。貧乏貴族のラスティニャックは、実はパリで三本の指に入る貴族の遠縁に当たる。彼を利用すれば貴族のサロンに出入りできると思ったデルフィーヌは、この貧乏学生と交際を始める。

小さな領地からの上がり細々と暮らしていたラスティニャックの実家は、パリの大学に通う息子のためさらに生活を切り詰めていた。そこへ、貴族のサロンやオペラ座に行ってもおかしくない衣装をそろえたい息子から助力嘆願の手紙が届く。母は父に内緒で思い出

の品を売ったり土地を担保に入れたりして得た金を送る。

上流社会に慣れていないラスティニャックは、賭け事で負債を抱え、ヴォケー館の住人ヴォートランに借金を申し込む。ヴォートランは一癖も二癖もある人物であった。

このヴォケー館には、父親から認知されていないために窮乏に耐えている美しく純情なヴィクトリーヌもいた。ヴィクトリーヌはイケメンのラスティニャックをひそかに慕っていたが、ラスティニャックもそれに気づき、二人は徐々に接近していく。

ヴォートランは、ヴィクトリーヌと一緒になれば、俺の友だちに頼んでヴィクトリーヌを父親に認知させてやると、ラスティニャックにささやく。ヴィクトリーヌの父は富豪だ。

書名 : 風の又三郎

著者 : 宮沢賢治

出版社 :

本文 : (約516字)

文章を読んでいて情景が思い描かれ、できればそれを自分の目でも見てみたいと思うことがある。宮沢賢治にもたくさんある。まずは兎(うさぎ)のホモイが登場する『貝の火』から抜粋してみた。「ホモイは立って家(うち)の入(い)り口(くち)の鈴蘭(すずらん)の葉さきから、大粒(おおつぶ)の露(つゆ)を六つ程(ほど)取ってすっかり顔を洗いました」、「お日様が砕(くだ)けた鏡のように樺(かば)の木の向うに落ちました」、「その晩ホモイは夢(ゆめ)を見ました。高い高い錐(きり)のような山の頂上に片脚(かたあし)で立っているのです。ホモイはびっくりして泣いて目をさました」。『二十六夜』から、「今夜ももう一時の上(のぼ)りの汽車の音が聞えて来ました。その音を聞くと梟(きょう)どもは泣きながらも、汽車の赤い明るいならんだ窓のことを考えるのでした」、「お月さまは今(いま)はすうっと桔梗(ききょう)いろの空におのぼりになりました。それは不思議な黄金(きん)の船のように見えました」。

以上、ほんの少しだけ美しい情景を紹介してみた。宮崎駿作品に通じるものがあるように思う。先日夕方の空に星が出ていたのを眺めていたとき、「ああ、これが『桔梗いろの空』というんだな。星がきれいだ」と思った。

ところで、初期の童話『蜘蛛となめくじと狸』『ツェねずみ』『蛙のゴム靴』などはちょっと落語っぽい雰囲気があって、お勧めの一品だ。

書名 : 祖父・小金井良精の記

著者 : 星新一

出版社 :

本文 : (約565字)

小泉構造改革の頃、小泉純一郎首相が「米百俵」ということをよく言っていた。戊辰戦争で焼け野原になった長岡藩に百俵の米が贈られたとき、飢えに苦しむ殺気立った藩士たちを前にして、「食べてしまえばすぐ終わってしまうが、これを売った金で学校を作れば人材育成ができ、何万俵もの価値を生み出せる」と、熱心に説得した家老がいた。それが小林虎三郎だ。彼は吉田松陰とともに佐久間象山の門下で学んだ。虎三郎の妹幸(ゆき)は同じ藩の小金井家に嫁した。幸の次男が小金井良精である。

東大医学部に勤務していた良精が妻を病気で失い意気消沈していると、同僚に縁談をすすめられた。相手は森鷗外の妹の喜美子。妹の結婚に関して決定権のある鷗外はベルリンから手紙で意志を伝えてきた。そこにはフランス語で一言「承諾」とあったという。

星新一は小さい頃祖父の良精がとても好きで、いつも祖父の書斎にいた。隣が祖母の部屋で、夜はいつも祖母と寝た。彼が布団の中で「少年倶楽部(くらぶ)」を読んでいると、隣で祖母が自作の和歌を読み返しながら直していた。くどいようだがこの祖母が鷗外の妹の喜美子である。

森鷗外と小金井良精との間にあった出来事の中で最も有名なのは、「エリス事件」であろう。帰国した鷗外を追いかけてきたドイツ人女性をうまく説得して帰国させたのが良精だった。彼はこの手の交渉を得意にしていたようだ。

書名 : 司政官

著者 : 眉村卓

出版社 :

本文 : (約569字)

司政官は官僚ロボットSQ1を従え、単身で遙か彼方の惑星に赴任する。そこで待ち受けるのは生態も思考形態も全く異なる原住民との、神経がすり減るようなコミュニケーションであった。さらに、地球連邦の統治に対する不満を露わにする植民者にも対応しなければならない。地球連邦は、将来的には各惑星の自治を認めるつもりでいるが、もちろんそれは支配下に置くということが大前提である。従って、原住民であろうが、植民者であろうが、逆らえば、圧倒的な武力によって鎮圧されてしまう。

司政官は地球連邦の職員でありながら、惑星の自治という目標を掲げた若い理想家が多い。彼らの多くは、原住民にも植民者にもよかれと、施政に心を砕くが、それがかえって両者の板挟みの原因になることもある。加えて、地球連邦の指示に従わなければならない立場でもある司政官は、原住民、植民者双方から、圧制者として敵対視される場合さえある。

惑星をたった一人で統治する司政官だが、彼には心強い味方がある。SQ1を頂点とした数万にも及ぶ官僚ロボットたちである。惑星統治に必要な判断、手続き、事業など、諸々(もろもろ)のことは彼らがやってくれる。それだけでなく、いざとなったら強力な武器を内蔵する飛行機や戦車の役割も担う。心強いロボットたちだが、時代が下ると、植民者の中には対ロボット工作に長(た)けた者まで現われてくるのだ。

書名 : 一九八四年

著者 : ジョージ・オーウェル

出版社 :

本文 : (約842字)

身の回りの人間が一人ずつ消える。その人が誕生してからの記録は全て書き換えられ、初めからその人がこの世に存在していなかったことになる。家族や職場の人たちも、その人など初めからいなかったかのように振る舞う。

個人の記録だけではない。国家の記録も常に書き換えられる。新聞や雑誌、テレビでは、一つの例外もなく、党の正しい方針が伝えられる。例えばもしも農業生産量が党の予測を下回ってしまったら？ 簡単だ。党の予測を掲載した全てのメディアが、現実に合わせて修正(改竄(かいざん))されるだけだ。だから、党の予測が外れることは絶対がない。そうあるべく、真理省の記録局では、職員が懸命に修正(改竄)作業に励んでいる。失脚した党の幹部が笑顔で手を振る写真が昔の雑誌に残っていたら大変なことだからだ。

ウィンストンも記録局で毎日必死に働いていた。そんなウィンストンの心は党に対する反逆心でいっぱいだった。彼はそこら中に設置してあるテレスクリーンに、不満そうな顔を録画されないよう細心の注意を払っていた。

ウィンストンの目の前で、最近よく周辺に現われるので気になっていた、美しい黒髪の女性が豪快に転んだ。あまりにも痛々しいので思わず手を伸ばし助け起こしてあげた。彼女が立ち去った後、手の中に紙片が残されていたのに気づき、ウィンストンは驚く。ドキドキしながら読むと、秘密警察に気づかれずに彼女が自分の気持ちを伝えようとしたことがわかった。しかし、自由恋愛が禁止されているこの社会で、彼女と二人で会ったりしたら、すぐに秘密警察にかぎつけられて消されてしまうだろう。そう思いながらもウィンストンは彼女と再接近するため知恵を絞らずにいられなかった。連絡を取り合う方法を編み出し、ついに二人は貧民街にある古道具屋の二階に密会の場所を見つけることができた。社会の八〇パーセント以上を占める貧しい労働者たちは比較的自由に暮らしている。その街にはテレスクリーンも設置されていない。そこで二人は休日ごとに出かけ、幸福な時間を過ごすことになった。

書名 : 明暗

著者 : 夏目漱石

出版社 :

本文 : (約1233字)

それまでの漱石作品とはどこか違う。最もそう感じたのは女性が前景に出てきた点である。それまでの漱石の女性、たとえば『三四郎』の美禰子や『草枕』の那美は、内面が直接的に描かれることはなかった。だから、魅力的で謎めいた女性という印象で終わってしまう。曖昧な態度や、謎めいた言動や、複雑な人間模様の中で、一幅の絵のように鮮やかな魅力を発するが、その心の内側を正面から表出することはついぞなかったのである。

私は漱石の作中に登場する女性では『こころ』の「お嬢さん」が気になっている。「お嬢さん」はいつも置き去りにされている。結婚問題にしても、先生とKがお嬢さんのいないところで勝手に決着をつけてしまった。恋に破れたと思ったKは自殺する。Kに対する罪悪感を背負った先生はお嬢さんとどこかよそよそしい夫婦生活を十年かそこら続け、お嬢さんには何も言わずに自殺してしまう。男たちは勝手な理屈やメンツにこだわって、女である自分をその埒外に置いて、勝手に物事を進め、そして自分を埒外に置いたまま、勝手に物事を終わらせる。お嬢さんはきっとそう思っただろう。お嬢さんの心は完全に宙に浮いて、その着地点をあてどなく探さなければならなかつただろう。しかし、お嬢さんの心は永遠に謎である。

ところが、『明暗』では、漱石のお延の扱いはまったく違う。お延は、あまりうち解けてくれない由雄にもの足りなさを感じながらも、取り繕って、よい妻を演じる。初めのうちは由雄の視点を中心に展開するので、お延の扱いは、『こころ』のお嬢さんの扱いと区別がない。大きく違ってくるのは中盤からである。中盤から世界は一転して、お延の視点に切り替わる。気立てがよく気品のある若奥様という印象のお延の、はきはきして意外に激しい気性が、堰を切ったように読者の頭の中に流れ込んでくる。

そして、『明暗』にはもう一人の重要な女性が登場する。由雄と惹かれあったのに由雄を捨てて由雄の友人に嫁いだ清子だ。由雄がお延に気持ちを向けきれないのは、言うまでもなく清子への気持ちを引きずっているためである。互いに気持ちを寄せ合っていたのに他の男に嫁いだ、こういう清子のような女性は、漱石の作品に繰り返し登場する。いわば「漱石の主旋律」だ。美禰子に三千代、御米。『夢十夜』「第一夜」の女と『文鳥』の女もこの部類だろうか。それはさておき、『明暗』の終盤でこの清子と由雄は再会を果たす。前半に見られた「由雄→お延」という視点の切り替えは、容易に後半の「由雄→清子」という視点の切り替えがくることを予測させる。女性を前景に出さなかつた漱石が、お延によってそれを果た

した。今度は清子の番か。この「漱石の主旋律」の女性が何を語り始めるのか、非常に興味がある。ところが、不幸にしてその一歩手前の段階で漱石は永眠した。漱石が『明暗』を仕上げていたら日本文学はどうなっていたらろう。よくそう言われるが、私もそう思う。水村美苗が書いた『明暗』の続編をやはり読んでみようか。

書名 : 孤島の鬼

著者 : 江戸川乱歩

出版社 :

本文 : (約409字)

初めに二つの殺人事件が起こる。一つは、完全な密室の中での殺人で、もう一つは、衆人環視の中での殺人だ。このトリックはなかなかよくできていると思う。推理小説史に残る名トリックなのかもしれない。

ところで、第一の殺人の犠牲者は主人公の恋人である。彼女は殺される直前に主人公に家系図を渡した。これを手がかりに犯人を捜してもらおうと思い、主人公はある探偵にその家系図を渡した。探偵はどこかに行って実に奇妙な日記を持ち帰り、主人公に渡す。その直後に、主人公を含むたくさんの人々が見ている前で、いつの間にか探偵が殺される。だれも殺されたことに気づかなかったのである。その後、主人公は奇妙な日記を読み始める。そこには、遠いところで、長い間、誠に奇妙な状態で毎日を過ごしてきた一人の女性が……。

とまあ、この辺でやめておこう。

恋人、連続殺人、家系図、奇妙な日記、不思議な境遇の女性、島、財宝、サーカス、これらが実に気持ちよくなっていく。

書名 : 白き瓶

著者 : 藤沢周平

出版社 :

本文 : (約579字)

藩政にうずまく陰謀に巻き込まれた剣の達人が、その人間的な魅力に引き寄せられた名脇役たちの助けを借り、極秘に下された藩命を見事に果たす。藤沢周平と言えば、こういう時代小説を想像してしまう。しかし、本書は歌人長塚節の生涯を忠実に小説化したものなので、剣豪が出てこないのは無論のこと、忍者も、奸計をめぐらす家老も、悪徳商人も、いっさい出てこない。その代わりに、明治の文壇の様子が、膨大な資料に基づいて丹念に描かれ、そこに繰り広げられる人間模様がかなり面白い。

正岡子規との出会い、伊藤左千夫との交流、夏目漱石との接点などが、手に取るように理解できる。伊藤左千夫と斎藤茂吉の激しい師弟対立の経緯を読み始めたら、野次馬的好奇心を満たすまでは本を閉じられなくなる。アララギ派がこのような内部抗争を繰り広げるのをよそに、前田夕暮や石川啄木、若山牧水が彗星のごとく、きらきらと飛翔する姿は、誠に印象的だ。

長塚節の晩年を彩る、黒田てる子とのほかなくも美しい純愛は、後半の山場である。節の結核が悪化し、家族が反対する中で、てる子は、見合いのときに一度だけ顔を合わせた節を訪れ、治療に専念してほしいと熱心に説得する。

「白埴の」の歌を贈った久保夫人の夫は、現九州大学耳鼻咽喉科の医学博士で、節の結核の治療に当たっていた。久保夫人との文通もまた、長塚節の晩年に鮮やかな色彩を添えている。

書名 : 真珠夫人

著者 : 菊池寛

出版社 :

本文 : (約631字)

真珠夫人といっても、真珠を特に好んでいつもたくさん身につけているというわけではない。財産家の未亡人だから、もちろん豪華な衣装を身にまとっているが、真珠のようにきらびやかなのはむしろ、その容貌と身のこなしであろう。大正時代の社交界で燦然と輝く、若く美しい瑠璃子が本書の主人公である。

彼女は女学校を出たての文学少女で、清貧を誇る政治家の娘だ。それが何の因果か、金の権化のような年配の実業家に嫁ぐことになる。彼女は父同様に、金の力で他人を支配しようとする人間を嫌悪していた。だからこそ、夫となるこの男を許せなかった。教養があり将来を誓い合った前途有望な恋人と引き離された末の結婚であるから、この恨みは一層深いのであった。

それ以来彼女はすっかり人格が変わってしまったようになる。清廉で清純な彼女が突然金の権化となり、各界で有望な青年たちと派手に交際し、浮き名を流す。しかも、男たちを冷酷に扱い、最後には手ひどい目に遭わせるのである。彼女は世間からすっかり毒婦のように見られるようになるのだが、なぜこのような変身を遂げたのか、結末まで読むと真相がわかる。「真珠夫人」と作者が名づけた本当の理由も。

自分の青春を無惨に奪われた女性が、苛烈な性格を備えて悪女になるという点では、ドストエフスキー『白痴』のナスターシャ、または東野圭吾『白夜行』の雪穂を思わせる。恋い焦がれる男たちの手の届かないところで孤高に輝くという点では、セルバンテス『ドン・キホーテ』のマルセーラを思わせる。

書名 : ポオ小説全集1

著者 : エドガー・アラン・ポオ

出版社 :

本文 : (約948字)

謎めいた女が、「私はもう死にます」と言って、本当に息を引き取る。そして、あり得ないことに、よほどあとになってから、ある種の復活を遂げる。

と来れば、漱石の『夢十夜』「第一夜」の女を思い浮かべる人が多いだろうが、実はそれではない。ポー（本書では「ポオ」としているが、やはり「ポー」のほうが一般的であろう）の『モレラ』だ。

「第一夜」の女は、白い百合の花となって復活する。では、ポーのモレラはどうか。それをここに書いてもいいが、そうすると、この短篇を読む楽しみを奪ってしまうだろうから、やはり書かないことにしよう。

死者の復活は、モレラだけではない。『ベレニス』、『リジイア』でも、題名と同じ名の美女が甦る。

東大で英文学を教えたラフカディオ・ハーンは、ポーの作品を教材として使ったことがある。漱石は東大でハーンの後任者だった。教材として使ったかどうかはわからないが、漱石はポーの作品を称賛したことがある。『夢十夜』の「第一夜」の女は、ポーの影響なのかもしれない。

ポーの『リジイア』で、漱石の「第一夜」を彷彿とさせる描写を抜き出してみよう。

それは、「リジイア」の美しさを詳細に描写する箇所である。彼女の美しい瞳に見つめられると、激しく心をかき乱されるということを説明する際に、このときの情緒を数々の具体的な例で定義するのだが、そのうちの二つの例が私の心を強くつかんだ。

「くりかえしていえば、私はすくすくと伸びてゆく葡萄(ぶどう)の蔓(つる)にその情緒を感じた」「――また隕星(いんせい)の落下にも、感じた」

これは、もしかしたら、「第一夜」に出てくる、石の下から伸びてきて、見る間に長くなる百合の茎ではないだろうか。「天から落ちて来る星の破片(かけ)」ではないだろうか。

『夢十夜』は、生徒が理解するのにも難しく、教師にとっても教えづらい作品だが、ポーの作品を参照しながら読むと、けっこう読解の助けになるかもしれない。

ちなみに、私は、『ベレニス』、『モレラ』、『リジイア』だったら、『モレラ』が一番、『夢十夜』の「第一夜」に近いと思うが、いかがであろうか。是非、一度読み比べてみてほしい。

ポーはこれらを、不気味な恐怖小説として描いているが、同じ復活の話でも、やはり漱石はその辺を抑え気味に描いている。美しく、幻想的で、ロマンチックな絵に仕立てている。

書名 : 二都物語

著者 : ディケンズ

出版社 :

本文 : (約902字)

スクリーンの闇の中から、泥道を走る一台の馬車が浮かんでくる。画面は馬に鞭をくれる御者に切りかわる。今度は疲れはてた乗客たちに切りかわる。そしてこれに続くひと悶着と謎のメッセージ。メッセージを受け取った一人の乗客は、ドーバー海峡沿いのホテルでブロンドの美しい娘と待ち合わせをする。そして二人は船でフランスに渡り、パリのアパートの六階に住む靴職人を訪ねる。

謎めいた出だしとスピーディーな展開、迫力と現実味、これはまさにハリウッド映画だ。いや、ハリウッド映画が、ディケンズやスタンダール、バルザックの手法を模範にしたに違いない。ハリウッド映画やアメリカ・ドラマのファンにとってディケンズの小説はたまらなくおもしろい。小説を読んでいるというよりは映画を観ているようだ。スティーヴン・キングが賞賛するのもうなずける。キングはディケンズのような作品が書きたいと語っている。ディケンズの時代、小説は朗読するものだったともいっている。朗読できないような小説はだめなものだともいっている。日本もかつてそうだったらしい。漱石も自作を周囲に朗読したそうだ。

名場面をたくさん紹介したいが、スペースは限られているので、一つだけ。

パリの下町に荷車がワイン樽を落とすシーン。樽が割れて赤ワインがこぼれると、人々が一斉に群がってすすりはじめる。口を泥だらけにして飲んでいる。「きたない」と思うだろ

うが、人間は飢えるとそのくらいのことは平気でするようだ。それほどフランスの民衆は貧しかった。貧しさにこれ以上耐えられなくなった民衆の矛先は、王侯・貴族・僧侶に向かっていく。フランス革命である。実はこの小説は、フランス革命を民衆の立場に軸足を置いて描いたものだ。革命が起こったのは、街路にワインがあふれた出来事の数年後である。

フランス革命というと、ヴェルサイユ宮殿に押し寄せた民衆の手でギロチンにかけられたルイ十六世と王妃マリーアントワネットを思い出す人も多いだろう。マリーアントワネットの豪華絢爛な宮廷生活の果てに待ち受ける悲劇。そちら側から革命を見るのも一つだが、『二都物語』では、パリの貧しい民衆や地方の農民の視点でこの一大史実を描く。

書名 : 芥川龍之介全集 3

著者 : 芥川龍之介

出版社 : 筑摩書房

本文 : (約1026字)

ありもしないことを公表したら、予想以上に世間が大騒ぎしたので、今さら嘘だとも言えず、弱り切ってしまった。こういう困った人は、昔からいたらしい。昨今では、万能細胞を実に意外な方法で簡単に作製できると公表して、窮地に陥ってしまった科学者がいたようだが、芥川の『竜』でも、同じような過ちを犯して大弱りした僧侶が登場する。奈良の猿沢の池のほとりに、「三月三日にこの池から竜が現れ、空に昇っていく」という内容の立て札を立てて、日頃の憂さを晴らそうとしたのである。軽い気持ちから公表したでまかせは、大きな反響を呼んだ。三月三日になると、奈良の町にとどまらず、摂津、山城、丹波などといった近隣諸国から集まった人々で、猿沢の池の周辺が埋め尽くされてしまったのである。いたずらをした僧侶の身にどんなことが起こるかは、『竜』を読んでの楽しみ。

芥川は、古今東西の文学作品を下地にして書くことが多かったようだ。『竜』は『宇治拾遺物語集』の中にある話のもとになっている。彼の作品には、『鼻』や『芋粥』など『今昔物語集』から取った作品も結構多い。漢文学から取った作品としては、『杜子春』、『黄梁夢』などがある。さらに、何から取ったか議論の分かれる作品もある。『蜘蛛の糸』だ。

ポール・ケーラスの『カルマ』には、お釈迦様がカンダタに蜘蛛の糸を垂らすという設定があるので、これが下地と言って間違いなからう。ところが、面白いことにドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』にも『蜘蛛の糸』と類似した挿話が登場する。グルーシェニカというあまり評判のよくない女が、純真な青年アリョーシャに語って聞かせた「一本の葱」という挿話である。こんな話だ。

あるとき天国にいる天使が地獄で苦しむ一人の女を助けてあげようと思った。その女が生前一本の葱を困っている人に恵んであげたからだ。これは彼女の、一生に一度の善行であった。天使は神様の承諾を得たあと、天国から一本の葱を差しだした。喜んだ女はその葱にしがみつき、上へのぼりはじめた。あと少しで天国に着くというところで、他の人たちが葱に気づいて、よじのぼりはじめた。すると女は怒って、その人々を蹴り落とした。そのとたんに葱がプチッと切れて、真逆さまに地獄に舞い戻っていった。

ドストエフスキーはロシアの民話をもとにこの挿話を書いたらしいが、「葱」というのがいかにもロシアらしい。

いずれにしてもこの種の話は、かなり古くからさまざまな地域で伝承されてきたらしい。

書名 : 蒲団・重右衛門の最後

著者 : 田山花袋

出版社 :

本文 : (約965字)

群馬県民なら誰もが知っている「上毛かるた」。田山花袋の札はもちろん、「誇る文豪 田山花袋」だ。

この郷土の偉人は、残念ながら漱石や鷗外ほどには、文学史で大きく取り扱われていない。「私小説」、「平面描写」、「露骨な告白」、「傍観者的態度」などという言葉で評される我が田山花袋は、芥川や太宰、川端や三島といった顔ぶれに比べても、看板役者と脇役ぐらいの開きがありそうで、あまりきらびやかなイメージがない。やはり文学は、あくの強さや毒がなければだめだ、ということなのだろうか。

インパクトがあって、読み始めは妙に期待させるが、読み進めると意外とちんまりした話で、何が良かったのかは最後までよくわからない、という作品が、日本ではありがたがられるような気がする。逆に、何の芸もなく平板に書かれたものは安く見られる傾向にあるような気がする。町を歩いているとうっかり蛇を踏んでしまい、いやな予感がして家に帰ると夕飯の用意をして待っていた蛇にビールをつがれたので、いっしょに夕飯を食べることにした。たとえばこんな話がいまの「日本文学」であろうか。

これは芥川賞選考委員である川上弘美の芥川賞受賞作品『蛇を踏む』の出だしたが、日本では、このような、現実っぽくもあれば非現実っぽくもある、という設定で描かれたものが、「文学」と呼ばれやすいような気がする。逆に、等身大の現実世界をありのままに描いた田山花袋の書くような作品は、あまり堂々と「文学」だと公言しにくい空気があるような気がする。

ところで『蒲団』だが、この作品は、ある文学者と、その門下生になった女学校出たての美しい娘との、すれ違いの恋の物語である。主人公の時雄は、門下生の芳子に師弟関係を越えた感情を抱くが、最後まで理性的に振る舞い、彼女の将来を心配して親元に送り返す。時雄は外面的には誠実な常識人の態度をとるが、内心では芳子への激しい恋情を抑えるのに苦しむ。

花袋の筆致は平明で律儀だ。技巧や演出に汚されない、そのままの現実が、まるでカメラで撮影されたかのように書かれている。いや写真より生々しく、東京の人や街、ハイカラな女学校、会社の仕事場などの実態が写しとられている。気どりや美化、デフォルメや戯画化などがほとんどない分、もしかすると漱石や芥川より、明治の息吹を正確に伝えているかもしれない。

書名 : 縮みゆく男

著者 : マシスン

出版社 :

本文 : (約758字)

マシスの作品は映画やドラマになったものが多い。『トワイライト・ゾーン』は、日本では『ミステリーゾーン』の名で放送されていたらしい。私はこれをビデオでみた。脚本家でもあるマシスはこのシリーズに多くの作品を提供した。私にもっとも強烈な印象を残したのが『運命のボタン』だった。

ある日一人の男が一軒の家を訪れる。その家の妻が客間に通すと男は一つの大きなボタンをテーブルに置く。「このボタンを押すと莫大な金額があなたのものになります。そしてあなたとは無関係の誰かが一人死にます」男はそう言った。男が帰ったあと妻は夫と相談する。夫はたちの悪いはずだから放っておけと言う。妻も夫と同意見だった。しかし、時間がたつにつれ妻の気持ちに変化する。ついにボタンの覆いをはずしてしまう。「あなた、ボタンを押してみない?」「だめだ、やめておけ」「私は試してみたいのよ」夫婦は言い争う。

夫婦はボタンを押してしまうのか? 押すと男の言葉どおりになるのだろうか?

実は、ドラマと原作では結末がかなり違っている。それを比較するのも面白い。船のデッキに出ると、急に霧が立ちこめて、全身がぐっしょり濡れてしまった。本書『縮みゆく男』の出だしである。その霧は核実験で放出された放射能物質と農薬散布でばらまかれた化学物質が混ざりあったものだった。

その日から男の身長は、日にミリ単位で縮んでいく。妻より背が低くなると、さすがに周囲も騒ぎだす。病院で診察してもらうが、治療法もない。娘より小さくなると、親の尊厳もなくなる。鼠ぐらいになると、飼い猫が襲ってくる。昆虫ぐらいになると、蜘蛛が襲ってくる。妻は夫がいなくなったと思い、引っ越しはじめた。気づかせようとして飛びつこうとするが、失敗して地下室の床に体を強打してしまう。

結末が非常に意外で、感動的であった。

書名 : 細雪

著者 : 谷崎潤一郎

出版社 :

本文 : (約1158字)

美しい姉妹の繰り広げる優雅な絵巻物であるが、ひたすら理想的な美が描かれているのかと思うと、そうでもない。美しい幸子(さちこ)、雪子(ゆきこ)、妙子(たえこ)の現実的な側面も、読者に幻滅を与えるのではないかと時には心配になるぐらいに、細かく描写されている。不思議なのは、それあるがために、かえって親しみが増すように感じられることだ。そのような姉妹たちの現実的な側面を取りあげてみてもよいが、ここでは少し趣を変えて、ふっと肩の力が抜けるようなユーモラスな場面を紹介することにしよう。

「えっ、『細雪』にユーモラスな場面などあるの？」と驚く人もいるかもしれないが、意外や意外、ユーモラスな場面がけっこう多いのである。「『細雪』って、小説版『サザエさん』じゃないのか」と思ったぐらいだ。

ユーモラスな場面を紹介する前に、この作品の主人公である雪子について簡単にふれておきたい。『細雪』というタイトルのとおり、どことなく線の細い女性である。とても美しいのだが、姉妹の中では、どちらかという目立たない存在である。特に幸子や妙子が派手な顔のつくりで、性格も明るいだけに、余計にそう見えてしまう。その雪子の結婚がなかなか決まらない。しかし、雪子は自分の気持ちを周りに言わない。言わないから意見がないかというところでもない。「天下の台所」と言われた大阪船場に生まれ育ったお嬢様だから、田舎暮らしはやはりしたくないらしい。女学校の英文科を優秀な成績で卒業したから、教養のない相手は困るらしい。そんなこんなで縁談を断り続け、一年また一年と年がたてばたつほど、条件のいい相手は少なくなり、ますます周囲は気が気でない。読んでいる読者も気が気でない。今度の見合いの相手とはうまくいくだろうか、などとハラハラしながら読んでいるうちに、この長い小説をすっかり読み切ってしまうほどだ。

さて、遅くなってしまったが、どことなく『サザエさん』的とも思える『細雪』の漫画チックな場面を三つ紹介しよう。

(その一) 雪子は姪の悦子の勉強をよくみている。ある晩悦子が寝たあと、雪子は作文を添削してあげようとした。読んでみると、悦子がうさぎを飼い始めたころの話である。うさぎの耳が寝ているので、立たせようとして雪子が足の指でつまんだことが書かれていた。雪子は慌ててその箇所を修正する。

(その二) 雪子の見合いの席で、ある年配の紳士が世間話をしている。

「このあいだ電車の中でコンパクトを出してパタパタ化粧している奥さんがいて、白粉(おしろい)の粉が飛んできてクシャミが出て困りましたよ」

「それ、私です」と幸子。

(その三) 幸子の行きつけの美容院の女主人の話。ある日彼女は駅で姪に電車の切符を買わせた。姪は女学校を出て主婦をしている現代的な女性。なんと回数券を買ってきて、残りはちゃっかり自分のものにしてしまったという。

書名 : 管絃祭

著者 : 竹西寛子

出版社 :

本文 : (約613字)

川がいつも目の前にある。船が往き来している。材木屋、呉服屋、廻船業者が軒を連ねている。岸壁には水の中を上り下りする段がある。雁木(がんぎ)という。雁木に船から厚い板を渡して大きな荷を担いで運ぶ男たちがいる。

朝は、貝や小魚を売る威勢のいい声が聞こえる。夕は、床几(しょうぎ)に腰を下ろす浴衣の老人たちや線香花火に見入る子供たちがいる。

本川(ほんかわ)のほとりの回漕問屋で生まれ、川の賑わいの中で育った邦子は、東京の偉い役人のところに嫁いだ親戚にふれて、小学校の同級生の夏子にこう言った。

「わたしは絶対川の傍を離れない。どうしてもお嫁に行かなければならない時は、川の傍のお店に行くんだから」

本川の風情、本川沿いに根を張った商家に暮らす人々の暮らし、本川に響くさまざまな音色、本川の匂い、そういったものを、小学校に通う女の子の視線で入念に描いて本作品の第三章が終わる。

続く第四章は戦後の本川沿いの情景である。本川にはもはや船の往来はない。浜胡子(はまえばす)神社の対岸には平和記念公園が建っている。公園の北にある相生橋のたもとに産業奨励館が鉄骨のドームをさらしている。俗に言う「原爆ドーム」である。原子爆弾は産業奨励館の付近、上空五七〇メートルあたりで炸裂した。

そのとき、呉服問屋に生まれ、父や祖母に厳しく行儀作法をしつけられ、控えめでうつむきがちだった夏子もその下にいた。回漕問屋に生まれ、賑やかな本川のたたずまいを愛し、絶対この川から離れないと夏子に言った邦子もその下にいた。

書名 : ノートル＝ダム・ド・パリ

著者 : ヴィクトル・ユゴー

出版社 :

本文 : (約1007字)

ノートルダムといえばパリ、と誰しも思うだろう。しかし、実際にはノートルダム寺院は無数にある。シャルトル、アミアン、ルーアンのノートルダム大聖堂など、有名なものも多い。それなのになぜ、ノートルダムといえばパリ、なのか。

そもそも「ノートルダム」は「私たちの貴婦人」という意味。「私たちの貴婦人」とはもちろん、聖母マリアのことだ。つまり、聖母マリアに捧げられた寺院は、みんな「ノートルダム」と呼ばれる。パリのは、数あるノートルダム寺院の一つにすぎない。

それなのになぜノートルダムといえばパリ、なのか。ヴィクトル・ユゴーのせいらしい。ユゴーの書いた本書『ノートル＝ダム・ド・パリ』、これが犯人なのだ。絶世の美女エスメラルダが登場するこの話があまりにも面白いので、バレエやミュージカル、映画などに乗って広まり、ついにノートルダムといえばパリ、となったようだ。ちなみにディズニー映画では、『ノートルダムの鐘』というタイトルだ。

ドタバタと目まぐるしく展開する話なので、脇役のグランゴワールという詩人に視点を定めて、事件を追っかけてみよう。

祭りの日のパリ、詩人のグランゴワールには大役があった。フランス王子の婚約を祝う劇の脚本の執筆だ。脚本もついに完成し、いよいよ開演。しかし、あれやこれやとアクシデントが続き、舞台は滅茶苦茶に。しかも、広場でエスメラルダが踊っていると聞いて、観客はみんな外へ出てしまう。劇を続けられなくなったグランゴワールも外に出て、エスメラルダを見る。そして、その美しさに心を奪われる。

報酬をもらいそこねたグランゴワールは部屋に帰れない。脚本の報酬で家賃の未払いを払うつもりだったからだ。ぼんやりパリの裏町を歩くうち、盗賊の街に入り込む。そこは一般人の決して足を踏み入れてはならないところだった。グランゴワールは盗賊の首領のところへ連れていかれ、殺されそうになる。そのとき、首領は不思議な提案をする。盗賊一味にグランゴワールと結婚したいと言い出す女がいたとして、その女といっしょに盗賊として生きていくのなら、命は助けるというのだ。しかし、グランゴワールと結婚したがる女は

一人もいなかった。そこへ入ってきたのがエスメラルダ。その話をきいて、あっさりグランゴワールと結婚した。

まるで手品のように美女を手に入れたグランゴワールの新婚生活が始まる。しかし、エスメラルダはひとときもグランゴワールの手の中にいなかった。

書名 : 八甲田山死の彷徨

著者 : 新田次郎

出版社 :

本文 : (約767字)

青森の部隊長は神田大尉（モデルは神成大尉）である。そして、弘前の部隊長は徳島大尉（モデルは福島大尉）である。

神田大尉は一言で言うと、謙虚な人である。彼は、職務に忠実で、ちょっとしたことでも非常に綿密な報告書を書く。独断専行を慎み、何かあれば随時上官に報告する。部下にも憎まれないように、常に神経を使っている。そんな彼は弘前の部隊長である徳島大尉に頭を下げ、雪中行軍について助言を乞う。なぜなら雪中行軍を一度も経験したことがなかったからだ。得た知識はきちんと上官の山田少佐に報告する。

徳島大尉は一言で言うと、ワンマン社長である。雪中行軍を経験したことがあるから、その経験に基づいて、彼一流の計画を立案する。上官には、全作戦を一任してもらわなければ行軍の指揮は執らないとすごみ、下士官には反論を断じて許さない。行軍に際しては、全隊員に研究テーマを与え、その結果が出ると、行軍方法をすぐさま変更する。地元住民から募った案内人を先頭に立て、行程内に民家があれば、そこに宿泊し、風呂にも入り、宴会も催す。

神田部隊はおよそその正反対だった。上官の山田少佐に反対されたせいもあるが、案内人は立てず、民家に宿泊させてもらうことは考えず、露営した。また、行軍の規模も違う。徳島部隊が小隊編成なのに対して、神田部隊は中隊編成で、しかも大隊本部の上官まで随行した。

二つの部隊のうちどちらかは、部隊内に一人の犠牲者も出さずに帰営する。どちらかは、ほぼ全滅し、雪山における世界史上最大級の犠牲者を出す。そのため、八甲田山という山が、誰しも一度はどこかで聞いたことのある山になったわけだ。その原因はどこにあったのか。部隊と部隊長の性格もその一因だったようだ。これは、企業とその経営者のあり方にも通じるといふことで、本書は経営を学ぶ参考としても読まれているようだ。

書名 : 旅のラゴス

著者 : 筒井康隆

出版社 :

本文 : (約939字)

彼が旅する世界は、我々の住む世界とは似て非なる世界だ。まず、人々の生活様式が違う。道具や貨幣、書物などはあるが、それらは非常に素朴な形態にすぎない。まるで古代ギリシアか中世ヨーロッパの世界のような趣がある。

それから、人々の精神力が違う。精神力と言っても、根性とか忍耐の問題ではない。この世界に住む人々は、みな特殊な能力を持っているのだ。たとえば、テレポーテーション。彼らは一瞬にして遠隔地に移動することができる。しかし、危険を伴うので、限定的にしかその能力は使用されない。これはたいがいの人々が有しているようだ。予知、透視、空中浮遊などの能力を持つ人も登場する。が、そういう人はまれにしかいないので、この世界でも非常に驚かれる。

実は、このような能力は、高度な文明を突然失った彼らが、その代償として獲得したものであることが、本書の中盤あたりで判明する。

読んでみると、ついのもり込んでしまうのが、筒井作品の特徴だが、『旅のラゴス』を読んでいてのもり込んでしまうのは、なんといっても、ラゴスが人々に知識や技術を与えるところだ。ラゴスはなぜか超時代的な技術を体得している。もちろん、その理由も読んでいくうちにのぞからわかるようになっていく。

ある鉱山では、銀の採掘と精錬の方法に苦慮していた。古代エジプトでは、銀の精錬は非

常に難しい技術だったので、銀は金よりも貴重であった。ラゴスの世界でもしかり。そこへ、銀の精錬法に熟知しているラゴスが登場し、その技術を伝授する。鉱山の経営者は非常に喜び、ラゴスに破格の待遇を与える。

ある南方の国では、コーヒーの実が豊かに実るのに、人々はその用途を知らなかった。ラゴスは、それが飲料として格別であることを教え、その効率的な栽培法、乾燥法、焙煎法、抽出法を伝授する。人々はコーヒーの虜になり、それを各国の人々に広める。またたくまにその国は裕福になり、恩人のラゴスを国王に祭り上げる。

これ以外にも、ラゴスが各地で伝授した技術は数知れない。農業、科学、医学、法律、経済、などなど。世界中の人々が、時代を超越したラゴスの知識に崇敬の念を覚え、ついにはラゴスを神として崇めるまでに至る。

しかし、そんな扱いを嫌うラゴスは、若い時の夢を求めて、一人極寒の地に旅立つ。

書名 : 嵯峨野明月記

著者 : 辻邦生

出版社 :

本文 : (約1205字)

風神・雷神で知られる俵屋(たわらや)宗達(そうたつ)が主人公の一人である。彼の画才が芽生えていく過程、版画を始めたきっかけについて、興味深いエピソードが書かれている。それを宗達の独白体で紹介してみたい。

小さいころのおれは、与三次郎が絵を描くのを見るのが好きだった。見るだけでは飽き足らず、おれは与三次郎に絵筆を借りて、絵の具を何かに塗って、紙に押しつけ、同じ模様をいくつも刷った。与三次郎はおれのために、板切れに花などの図柄を彫ってくれた。おれは

その遊びに夢中になった。与三次郎はそれらを捨てずに保管しておき、おれの親父に見せた。親父は提灯の図柄を依頼されていたが、その注文があまりにも大量だったので、困っていた。一つ一つに絵を描くのでは期限に間に合わないからだ。そこで、親父はおれと与三次郎に提灯の図柄を刷るように命じた。版画などだれも商売にしていない時代だったから、これは一種の賭であった。ところが、この提灯は大当たりであった。おれと与三次郎は、夜の京の街の果てまで、あかあかと灯る提灯を飽きることなく見て歩いた。

巨匠俵屋宗達の誕生秘話である。それまでの時代にはなかったまったく新しいものが生みだされる話はいつでも面白い。

嵯峨野明月記は、桃山時代から江戸時代初期にかけて制作された嵯峨本という名の豪華本の誕生秘話である。デザインや装丁を担当したのはもちろん宗達である。文字は書いたものではなく、現代でいう活字であった。わかりやすく言えば、筆で書かれたとおりの崩し字を木に彫って、それをたくさん並べて刷ったのである。日本で最初の印刷本と言われている。金銀、雲母をぜいたくに刷りこんだ和紙に印刷したもので、大変豪華なものであった。その活字の元となったのは、当時の三筆の一人であった本阿弥(ほんあみ)光悦(こうえつ)である。光悦というと、京都の光悦寺という観光の名所を思い浮かべる方も多いただろうが、これは光悦らの芸術家が洛北の鷹峯(たかがみね)につくった芸術村の跡である。

宗達の模様を刷ったうえに、光悦の艶麗華麗な書体を刷り、『伊勢物語』や『徒然草』など、数々の名著を刊行した、嵯峨本というシリーズは、当時の人々の注目の的となり、身分の高い人で嵯峨本が家に一冊もないということは、かなり恥ずかしいことだったそうだ。

印刷、出版事業を企画運営した角倉(すみのくら)素庵(そあん)という実業家も本書の主人公の一人である。つまり、俵屋宗達、本阿弥光悦、角倉素庵の三人が、本書における最重要人物なのだ。

タイプの異なる三人が順繰り順繰りに独白するという変わった形式でこの作品は綴られていく。三人のうちのだれが最も魅力的かといった視点で読み進めるのもよいだろう。

私は光悦に惹かれた。芸術家肌の光悦は、自分の意志とは無関係に、反信長勢力に巻き込まれていく。しかし、頼みの綱の明智光秀の亡きあと、彼の運命はまことに多難である。四条河原に首をさらされた仲間たちを見た光悦が荒れていくところは、本作品の見所の一つである。

書名 : 或る女

著者 : 有島武郎

出版社 :

本文 : (約773字)

明治の世の女性は、自分で選びとれることがあまりなかった。そのなかで、葉子は、自分の意志を貫いた。彼女をそうさせたのは、一つには母親の影響である。彼女の母親は、女性解放運動の急先鋒であった。一つには、キリスト教を通じての、西洋文明との接近である。少し横道にそれるが、彼女は、内村鑑三(内田という姓で登場する)にもだいぶかわいがられていたようだ。そして、もう一つには、大恋愛の末の結婚生活が、想像とはまるでちがう、味気ないものであったことである。彼女は、うわべは紳士然としているくせに、内心で女性を見下し、どこまでも自分を支配しようとする夫に、たちまち嫌気がさした。そして、突然出奔し、数ヶ月後に離縁を申し出る。

社会における女性の境遇の理不尽さを糾弾する女性では、『ドンキホーテ』に登場するマルセーラが強烈であるが、葉子の男性に対する怒りも負けていない。マルセーラは、すべての男に愛情を抱かず、山野で暮らす道を選ぶ。その理由を表明するマルセーラの論理が卓抜なので、参考までに裏面に載せてみた。ただし、男を拒むか拒まないかという点が、葉子とは大きく違う。葉子は、次々に奔放な恋愛に向かう。そんな彼女は、男にどんな怒りを抱いたのだろうか。

国木田独歩の『武蔵野』は、静かな時を過ごし、心を豊かに満たしたいときに、うってつけの名作である。『武蔵野』を読んだとき、独歩に高潔な印象を持ったが、そのイメージは、本書を読むことによって、大きく揺さぶられることになった。先に触れた葉子の別れた夫のモデルが独歩らしい。彼女の心中表現のなかに、独歩が新婚生活でいかに葉子(佐々城信子がモデルらしい)を疎んじさせたかが描かれている。この場面は、さながら現代の週刊雑誌における芸能人暴露記事である。現代だったら有島武郎は、独歩に訴えられたのではないかと、余計なことまで考えた。

書名 : 初恋

著者 : トウルゲーネフ

出版社　：

本文　：　（約907字）

初恋について打ち明けるといふ取り決めのもと、紳士たちが順番に話をするようになった。ウラジーミルの番になると、彼は、口では話しづらいから、書いたものを後日諸君に読ませようと言った。そして、彼は約束どおり初恋の体験を書いて持ってきた。以下が、彼の手記のあらましである。

ウラジーミルはそのころ、十六歳の純情な少年であった。彼は、近くに越してきたジナイーダという娘に一目惚れしてしまった。しかし、ジナイーダの周りにはいつもたくさんの貴公子が取り巻いていて、競争は熾烈であった。彼女は気を持たせることを言ったり、冷たくあしらったりして、男たちをもてあそんでいた。年下のウラジーミルの気持ちが手にとるようにわかるジナイーダは、自在に彼を操り、天に昇らせてみたり、谷底に突き落としたりする。そんなふうにジナイーダが浮かれ騒いでいる傍らでは、彼女の母親が、明けても暮れても金策に追われていた。

そんなある日、ウラジーミルは、ジナイーダが思い詰めた表情で窓の外をじっと見つめているのを偶然目撃する……。続きは本書で。

わがままでコケティッシュなジナイーダという女性は、強烈な個性を発散しているから、間違いなく読者の印象に刻まれるであろう。しかし、光り輝くジナイーダの傍らで、常に影のように描かれる母親も、なかなか興味深い人物である。運が悪くて愚かな母親は、下級役人ではあるが、裕福な家の娘として生まれ、上流貴族ではあるが、落魄(らくはく)した家の美男子と結婚し、そして破産して落ちぶれた。この母親は、ウラジーミルの目には醜く無能で下品な女性として描かれる。しかし、よく見ると、彼が虜となったジナイーダも、美貌と若さによってぼろ隠しされてはいるものの、その振る舞いや性格はどことなく母親に近いものがある。この手記を書くときの年配のウラジーミルならば、そういう面もはっきり見ていたにちがいない。それらもろもろの要素を考え合わせると、彼が書きたかったのは初恋の思い出だけではない気がする。美しさよりも堅実であることが重要だという教訓も無論あるだろうが、それでもまだ足りない。恋は人の運命を一変させる。もしかするとそれがいちばん言いたかったのかもしれない。

書名 : 万延元年のフットボール

著者 : 大江健三郎

出版社 :

本文 : (約780字)

カフカの『城』のような展開である。カフカの『城』はこんな展開だ。一人の男が城に頼まれ仕事に行く。城の役人は頼んでないと言う。男はこじれた話が解決するまで村の宿屋に泊まる。以来、村人や城の関係者やらとの間にねじくれた交流が生じ、問題を解決しようとすればするほど、問題はいつそうこじれていく。村人や城内の人々はいずれも考え方や生活ぶりが奇妙で、男にあれこれと理不尽なことをふっかけてくる。いったい男はいつになったら城で仕事ができるのか。その答えの糸口もつかめぬまま、カフカのものすごい筆の力で読者は迷宮の奥深くまでつれていかれる。

本書の展開はまさにこれに似ている。

「僕」の友人は実に奇妙な方法で自殺を遂げた。「僕」の子供は精神的な疾患で療養所に入った。「僕」の妻はアルコール依存症になった。そこへ、革命家の弟がアメリカから戻り、珍妙な二人の同士をひきつけて、「僕」に会いに来た。弟は「僕」に、今の生活をすべて捨てて、四国の故郷で新生活を始めようと提案する。行動的な弟の強力なリーダーシップのもと、「僕」は妻と珍妙な二人の同士と一緒に四国の山の中の村に里帰りした。すると、実家の管理人の妻が「日本一の大女」になっていた。

こんな感じで、物語は進行していくが、「僕」の問題はいつこうに解決しない。むしろ、奇妙な人々が次々と登場し、問題は激増していく一方である。訳のわからない話とってしまえばそれまでだが、読んでいるうちに、なぜか奇妙な充足感が得られるような気がするのが不思議だ。よくある物語には満足できなくなっている人に薦めたい。特に、カフカやベケットや安部公房などの理不尽な世界を愛好する人なら、きっと気に入ってもらえるのではないだろうか。

それにしても、カフカの『城』に出てくる宿屋の巨大な奥さんはインパクトがあった。大江もあの奥さんが面白いと思ったのだろうか。

書名 : 放浪記

著者 : 林芙美子

出版社 :

本文 : (約761字)

ブログのような感じで書かれていて、すいすい読める。実は林芙美子って、世界最初のブロガーだったりして……。「大正時代のブロガー」。言葉でしか言い表すことができない、存在不可能な概念である。それはともかく、そんな文章が五百ページを越えて続く。「長編小説はちょっと……」とお嘆きの貴兄には敬遠されてしまいそうだが、中身はすべて、

(六月×日)

美しく透きとおった空なので、丘の上の緑を見たいと云って、……

というパターンで書かれていて、(×月×日)の記事は、だいたいどれも一〜四ページに収まる。たまに長いのがあってもせいぜい五、六ページぐらいだ。そういう(×月×日)という記事が全部で二百近くある。「そんなふうに短いが集まっているだけなら読めるかも」と思った方は、是非手にとってみてほしい。

彼女の人生は波瀾万丈すぎて、一般の人のあまり経験しないことが次から次へと起こるので、この日記風文章はとてもおもしろい。一つだけその概略を紹介してみよう。

ある日夫と散歩に出たら、夫を見失ってしまった。帰宅すると夫が怒って食器を投げつけた。悲しいので、家を飛び出て、駐車場の前で佇(たたず)んでいると、二人のお婆さんに声をかけられた。宗教の勧誘だった。いっしょについていくと、アンパンをもらった。食べるだけ食べると、一目散に逃げ帰ってきた。

まあ、それだけの話なのだが、なんだか短編小説にでもなりそうな話ではないか。林芙美子をはじめ詩人として世に認められたようだ。彼女の詩もこの作品のところどころに登場する。それが非常におもしろい。一つだけ詩の一部を引用して筆を置こう。

お釈迦様！

あんまりつれないではござりませぬか

蜂(はち)の巣のようにこわれた
私の心臓の中に
お釈迦様
ナムアマダブツの無常を悟すのが
能でもありますまいに
その男振りで
炎のような私の胸に
飛びこんで下さりませ

書名 : 一週間

著者 : 井上ひさし

出版社 :

本文 : (約1212字)

アメリカの捕虜になった大岡昇平の『俘虜記』と比べながら読むとよいだろう。『一週間』はロシア(当時はソ連)の捕虜になる話だ。南国でアメリカの捕虜になった兵士と極寒の地でロシアの捕虜になった兵士とでは、天国と地獄ほどの違いがある。捕虜の生活が天国とは、誤解を招く表現だが、『俘虜記』を読む限りでは、日本人捕虜の待遇はそう悪くない。アメリカが裕福な国であることが、南方の日本人に幸いしただろう。どこまで本当かはわからないが、食生活は本土の日本人よりもましで、『俘虜記』の兵士たちはだいたい太っている。一方、「シベリア抑留」という言葉からも非常に過酷なイメージを受けるが、ロシアの捕虜の生活は厳しかったようだ。さまざまな原因が複合してそういう状況になったようだが、やはりロシアの気候と経済状態がいちばん大きかったのだろうと、『一週間』を読んで思った。

したがって、『一週間』は、非常に重苦しいテーマを扱っているのだが、そこは井上ひさし、喜劇的要素をふんだんに盛り込んで、悲壮感をかなり軽減している。リアルさは『俘虜記』の方が上だ。生々しく、五感に訴えてくる。かたや『一週間』には遊び心がある。エンターテイメント的要素が盛り込まれていて、飽きない。どちらがよいかは、好みのわかれる

ところだ。

脱線の多い小説である。『俘虜記』も脱線はあるが、あくまでもエピソード（挿話）の枠からはみ出ない脱線である。『一週間』は違う。横道からそれた話がどんどん長くなる。無数の別の長いエピソードを、簡単な本筋で辛うじてつなぎ止めているという具合だ。しかし、その脱線が実におもしろい。喜劇作者の井上ひさしは、一つ一つのおもしろい脱線話を、独立した舞台の脚本として書いているにちがいないのである。読んでいると劇が浮かんでくるのだ。お気に入りの話はたくさんあるが、いくつか挙げるとすると、母親英雄勲章を持つ食堂のおばちゃんのハル・ステゴブナ・ノーソワの身の上話とか、収容所の捕囚である小松修吉と、同じく捕囚である酒井忠志が、実はかつて日本で地下組織の一員として極秘情報を伝達し合う関係であったことに気がつく話とかあたりだろうか。

後者の話をざっと紹介しよう。小松修吉は、日本にいたころ、当局の目をかすめるため、古本屋を経営しながら、党员たちと連絡を取り合っていた。党本部からの極秘連絡を小松に伝達するのは、パン屋の店員だった。それが酒井だった。酒井の伝達媒体は、食パンだった。調理帽をまぶかにかぶった酒井は、小松の部屋の窓にパンを投げ入れると、さっと消える。小松がパンを割ると中から紙片が出てくる。あるとき、小松が紙片に書かれた指示に従い、ある事務所に行くと、若い男が待っていた。男は党の幹部だった。男は小松に上海の本屋に向かうよう指示する。党の運営資金を運搬するのが小松の役割だと言う。小松が上海の本屋に入ると、指示通りセザンヌの絵が……。おっと、続きは本書で。

書名 : グレート・ギャツビー

著者 : フィッツジェラルド

出版社 :

本文 : (約584字)

あらすじにしてみると簡単である。ニューヨークの豪邸に住むギャツビーという若い男は、毎晩盛大なパーティーを開催していた。集まる人々は、ギャツビーについて、実はよく知らない。そこに、語り手でもあるニックという証券マンが訪れる。ニックは参加者にギ

ヤツビーについて話を聞くが、その多くは過去にまつわるよくない噂である。ニックの友人のトム、トムの妻でニックのまたいところでもあるデイジィ、デイジィの親友で女子プロゴルファーのミス・ベイカーといった登場人物がいろいろな問題を起こすなか、ニックはギャツビーに近づき、彼が長年胸に秘めていた想いを知る。

実際に読み始めてみると、ストーリー展開などはどうでもよくなり、それよりも、フィッツジェラルドが文字で構築した、色鮮やかで妙に心に沁(し)みてくるイメージと感覚の融合した世界にしびれてしまうのである。この感覚は不思議である。読まなければわからない。たとえ読んだとしても、ストーリーを知ることがを目的に読むのではわからない。言葉の一字一字を読み味わい、情景を思い浮かべ、押し寄せる感覚に身を委ねるような読み方をしないとわからない。きっとこういう読みができることが、価値ある文学作品の条件だろう。ドビュッシーとかビル・エヴァンスとかは、音で我々をしびれさせる。文字でしびれさせるのは、フィッツジェラルド、ヘミングウェイ、志賀直哉、堀辰雄あたりか。

書名 : ボヴァリー夫人

著者 : フローベール

出版社 :

本文 : (約667字)

夢見ていた結婚生活とはほど遠い状況に幻滅した女性が、道ならぬ恋路の果てに破滅する話。一言でまとめるとそうなる。そういう意味では有島武郎の『或る女』と似ている。もちろんフローベールの方が時代的に前だが。

ボヴァリー夫人というと、翅の扇子でも持っていそうな、ルイ王朝風の貴婦人をイメージしてしまうが、名前のエマと呼ぶと、もっと近づきやすい庶民的なイメージになるうか。

エマは大きな農家の娘であった。しかし、ロマンチストな彼女は、家業があまり好きでは

なかった。娘時代に修道院に入れられていたときに、ルイ王朝的な優雅な生活に憧れた。修道院から戻ると、父親の怪我の治療に来た医者に見初められた。エマも若い医者に好意を抱いた。めでたく結婚し、確実にワンランク上の生活を手に入れたはずであったが、エマの心は満たされなかった。パリに憧れていた彼女が移り住んだ夫の医院は小さな田舎町トストにあった。パリどころではない。ルーアンでさえ遠かった。この先ずっと地味で退屈な生活をしていかなければならないのかと思うとエマは憂鬱になり、だんだん心の病に冒されていく。

安定しているときのエマは、良妻賢母である。針仕事にも熱心に取り組み、夫の服装にも気を配る。しかし、いったんふさぎ込むと全く変貌してしまう。家事をおろそかにし、自分の服装にも夫の服装にも無頓着になる。

不満を夫にぶつけられないエマは、一度教会の司祭に相談しに行った。しかし、タイミングが悪かったために、中途半端な話で終わってしまう。結婚生活の悩みを相談できる場があれば、悲劇は起こらなかったかもしれない。

書名 : 雪国

著者 : 川端康成

出版社 :

本文 : (約1215字)

能のような小説である。能の主人公は幽霊である。小野小町や源義経が幽霊になって登場する。この世に無念の思いがあるためである。彼らは自分がどんな目であったかを舞いながら謡う。舞は次第に激しくなり、最後は燃えさかる炎のようだ。そして、自分の思いを謡い尽くすと、静かにあの世に帰っていく。それぞれの演目で内容は違うが、幽霊が思いのたけを謡い上げることは共通する。

能は静かすぎて退屈だという人がいるが、たしかに幽霊が登場して自分の生前の経験を語り始めるところまではとても長いし、動きもあまりないから、退屈と言えば退屈だ。しかし、いったん幽霊の心に火がついて、燃えさかる火炎のように舞い狂う場面は決して退屈な

ものではない。激しい囃子の強烈な音響と相まって、観劇者の胸に迫ってくる。幽霊がやってくるまでの静かな時間があるからこそ、この激しさが生きるとも言えよう。静あつての動。能にはやはり初めの静寂がどうしても必要に思う。

幽霊はいきなり登場するわけではない。例えば旅人がたまたま壇ノ浦を通りかかるとか、きっかけとなる人物が必要だ。幽霊がその人に自分の思いを訴えるというところからドラマが急展開するわけだ。専門用語では主人公である幽霊をシテ、幽霊が自分の気持ちを聞いてもらう相手をワキと言う。

冒頭に『雪国』は能のようだと書いたが、では、この作品のシテは誰か。もちろん駒子である。駒子を乱舞に導くワキ。それが島村だ。この小説が能だとわかれば、読者はストーリーを読むことより、燃えさかる駒子の思いに軸足をおくべきだろう。駒子の境遇、夢、無念さ、それらを駒子の時々のしぐさや言葉の端々から読み取り、つなげていく。ラストの文字通り火炎のシーンでは激しい囃子の音が聞こえてくるような気がする。我々はこの作品を頭で理解するのではなく、駒子の乱舞に打ちのめされる形で味わうべきだろう。

日本文学の代表とされるのももっともである。能という独特なダンスを味わえる感性を持つ日本人の肌に合う作品であるし、そういう日本人の心性を外国人が理解するのにも適している作品である。

古きよき日本を代表する深い情趣の感じられる作品だという見方は一面的にしか合っていない。川端は横光利一と並んで新感覚派の旗手であった。彼らの文体は斬新だ。新感覚の「感覚」とは何かと思うが、私は視覚や触覚など、いわゆる五感だと考えている。彼らの時代は、機械文明の発達や映像メディアの普及で、それまでの人間の五感が味わったことのない経験が可能になった。冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」は、当時完成直後で日本最大の清水トンネルを汽車で越えて、全く違う風景に瞬時に到達した驚きが率直に表れている。横光の『蠅』には、走る馬の額の汗粒に緑の森の景色が逆さまに映るという、映画のカットのような情景が描写される。科学技術と映像技術の革新により人類が獲得した新感覚を彼らは積極的に小説に取り入れたのだ。

書名 : 嵐が丘

著者 : エミリー・ブロンテ

出版社 :

本文：（約1245字）

悪夢をもとに仕立てた小説。そういうものに、漱石の『夢十夜』、安部公房の『笑う月』などがある。内田百閒に至っては、どの作品も悪夢という気がする。理不尽な出来事が次々と襲いかかり、夢の中で困っている自分がいる。目が覚めると、ああ、夢でよかったと安心する。時には、夢の登場人物の言葉がいつまでも頭の中でぐるぐると駆け巡り、夢の中の感情をしばらく引きずることもある。実を言うと、『嵐が丘』は、そんな後味の悪い夢のような小説である。実際、語り手の「ぼく」は、ヒースクリフの住む「嵐が丘」に泊まったときに、悪夢を見る。

「ぼく」は、「嵐が丘」に来たときから嫌な印象を持っていた。まず、主(あるじ)のヒースクリフが嫌な男であった。次に、使用人のジョウゼフも嫌な老人であった。さらに、ヘアトンという若い男も嫌な態度であった。もう一人、「若奥さま」と呼ばれている美しい婦人は、嫌な、というわけではないが、何か奇妙な感じであった。唯一ジラという家政婦だけは、普通の感覚の人で、「ぼく」の世話をまともにみしてくれる。その彼女が、この家は変わっていると言うのだ。「ぼく」が寝台で寝ようとする、「キャサリン」という名前を発見する。奇妙なのは、「アーンショー」「ヒースクリフ」「リントン」と、三つの姓が書いては消され、書いては消されしていることだ。さっきの若い女性がキャサリンなのか？ ヒースクリフとどう関係なのか？ ヘアトンとはどう関係なのか？ クエスチョンマークでいっぱいになったまま「ぼく」は眠りに落ち、悪夢を見たのであった。

読者の頭もクエスチョンマークでいっぱいである。巻頭にある人物系図を何度見ても、さっぱりわからない。さて、クエスチョンマークでいっぱいになった「ぼく」は、翌朝「嵐が丘」から「スラッシュクロス」に戻る。ところで、「嵐が丘」とは屋敷の名称である。同様に「スラッシュクロス」も屋敷の名称である。この二軒は三キロほどの距離にある。二軒ともヒースクリフの所有である。ヒースクリフは、「スラッシュクロス」に借り手を募集した。それに応じたのが「ぼく」だ。しかし、最初の家主訪問は、あまりにも奇妙な印象を「ぼく」に与えた。「スラッシュクロス」に帰ってからも、そのことがどうにも気になった。すると、話し好きな家政婦のディーナが、「ぼく」の質問に何でも答えてくれたのだ。ディーナは、「嵐が丘」で「若奥さま」と呼ばれる美しい婦人の母親が少女であったころから現在までの長い長い話を聞かせてくれた。これがこの小説の中身である。だから、この小説の語り手は「ぼく」というよりは、ディーナと言った方が正確だ。

家政婦のディーナによって語られる長い話によって、「嵐が丘」の謎の全容が解明される。その謎解きがあまにも面白くて、気が付くと、この長い小説を読み終わっている。そういう意味では、推理小説と言ってもいい。また、数奇な運命を送った登場人物たちは、誰もが底知れぬ苦痛と悲哀をなめ尽くす。そういう意味では恐怖小説と言ってもいい。

書名 : 城

著者 : カフカ

出版社 :

本文 : (約1088字)

一人の男が城に頼まれ仕事に行く。城の役人は頼んでないと言う。男はこじれた話が解決するまで村の宿屋に泊まる。以来、村人や城の関係者やらとの間にねじくれた交流が生じ、問題を解決しようとすればするほど、問題はいつそうこじれていく。村人や城内の人々はいずれも考え方や生活ぶりが奇妙で、男にあれこれと理不尽なことをふっかけてくる。いったい男はいつになったら城で仕事ができるのか。その答えの糸口もつかめぬまま、カフカのすごい筆の力で読者は迷宮の奥深くまでつれていかれる。

問題がこじれていく様子を少し紹介しよう。主人公のKが村長のところに掛け合いに行く場面だ。ちなみにKの職業は測量士である。つまり、測量士として城に雇われたからこそ、はるばるこの雪深い村まで苦労してやってきたのであった。

そんなKに対して村長は冷たい言葉を言い渡す。こんな内容だ。

測量士の招聘に関して行政府から発令された文書が、お役所の縦割り行政的体質の弊害をまともに受け、宙ぶらりんになってしまった。しかも、測量士の招聘問題に関して、賛成派と反対派で論争が巻き起こり、事態が深刻にねじかれてしまった。とにかく、私としては、測量士を必要としないと、すでに行政府に返事したはずなのであるから、あなたには、速やかにこの村から出て行ってもらいたい。

自分の運命を握っているのはクラムという役人であることをKは知る。Kはクラムに事情を聞きに行こうとする。しかし、クラムは城の役人の中でもかなり重要な人物で、そう簡単には会えない。接触しようとするとうすぐに邪魔が入る。最初の関門は「橋屋」という旅館の女将(おかみ)である。Kは窮地に陥る。そこへ支援者が現れる。「縉紳館(しんしんかん)」という旅館で働くフリーダという女性である。フリーダは彼にクラムの姿をこっそり見せてくれたが、直接対面するのは不可能であると告げた。クラムに会って文句を言う権利がある

と思っているKは、反論する。埒のあかない話の末、なぜかKはフリーダと結ばれる。それを知った「橋屋」の女将は怒って、Kと口論をする。Kも負けていない。巧みな作戦でついにクラムの居場所を突き止めるが、クラムはすりと行方をくらます。

Kが絶望していると、クラムの使者が手紙を持ってくる。こんな内容だ。

あなたは測量士として期待どおりに成果を挙げている。村人とも非常にうまくやっている。そのうちに十分な報酬を与える。

測量士として何も仕事をしていないし、村人たちと非常に険悪な関係になっていると思っているKは、この手紙に当惑し、憤慨する。

このあとKはなぜか学校に勤めることになるのだが、やはりそこでも面倒が起こる。

書名 : サンクチュアリ

著者 : フォークナー

出版社 :

本文 : (約672字)

藪の中の泉ごしに二人の男が向き合っている。辺りは静まり返り、空気が張り詰めている。一人はポケットにピストルを持っている。

『サンクチュアリ』の冒頭の場面である。まるでアメリカの犯罪ドラマを観ているみたいだ。男の一人はなぜここに来たのか。もう一人はなぜピストルを持っているのか。

時代は禁酒法時代のアメリカ。そう、アメリカには、短かったが、禁酒法の制定された期間があった。麻薬と同じように、酒を造ったり売ったりすると罰せられたのである。先ほどの二人の男のうちの一人が、ウイスキーの密売人である。

場面を変えよう。

ある大学のパーティー会場前である。三人の男が座り込んで酒を飲んでいる。美しい女子大生が男子学生と一緒にパーティー会場に入る。テンプルとガウアンである。三人の男は悔しがっている。

パーティーが終わって、テンプルとガウアンは別れる。ガウアンは酒を持っている三人の

男に話し掛ける。男たちはガウアンを、酒を売る家まで連れて行く。ガウアンは泥酔し、眠りに落ちる。三人に起こされたガウアンはトイレにいることに気づいた。壁に女性の名前が書いてある。テンブルの名前だった。ガウアンはまた眠りに落ちる。

場面は朝の駅に変わる。

やっと目覚めたガウアンはテンブルを迎えに行く。車の中でガウアンは、テンブルに三人との関係を問い質す。興奮しているガウアンは前をろくに見ていない。目の前に大きな倒木が見える。テンブルは体を突っ張った。

この先は、自分で読んでみよう。

冒頭の二人の男は何を争っていたのか。

テンブルとガウアンはどうなるのか。

これら二つの出来事には関係があるのか。

書名 : 阿部一族・舞姫

著者 : 森鷗外

出版社 :

本文 : (約1127字)

エリスと豊太郎の悲恋が描かれる『舞姫』は、森鷗外の実体験に基づくのではないかと誰でも思う。「エリス事件」などを耳にしたことがある人は、余計にそう思う。『普請中』という鷗外の短編を読んだ人は、ますますそう思う。で、真相はどうかと言うと、どうやら半分当たりで半分はずれというのが落としどころのようだ。小堀桂一郎『ミネルヴァ日本評伝選 森鷗外』、新関公子『森鷗外と原田直次郎』あたりに詳しいが、『舞姫』の前半(エリスと付き合い始めるあたりまで)の豊太郎はほぼ鷗外自身がモデルと言ってよく、後半(特に妊娠したエリスを捨てるあたり)の豊太郎は、鷗外ではなく原田直次郎という人がモデル

なのだそうだ。それでは、後半になって、自分自身をモデルにした登場人物を出すのはやめたのかというと、それも違うようだ。後半、豊太郎を支援し、かつ、諫める友人が出てくるが、どうもこの友人が森鷗外らしいぞと、小堀敬一郎と新関公子は教えてくれる。

相沢謙吉。これが豊太郎の友人の名である。小堀の『森鷗外』から引用する。

カフェ・ミネルヴァの給仕女で大して魅力を有するわけでもないマリイといふ貧家の女と同棲して妊娠までさせ、その跡は要するに金銭で片をつけて歸國してしまふ…(中略)…森は〈要するに原田の所行は不可思議と謂ふべし。原田は素と淡きこと水の如き人なり。余平生甚だこれを愛す。故にその此の如き行あるや、余又甚だこれを惜む〉と日記に記してゐる

さらに鋭く切り込むのは新関公子である。新関は、森鷗外が原田の苦境を救うため、文部省(現文部科学省)高官の欧州視察随員に原田を推薦したのではないかと論じる。原田は美術に詳しくフランス語が巧みだったので、これはまあ妥当な推論とも言えよう。それに、たしかに天方大臣に随行しベエテルブルクの王城で賓主の間を周旋しフランス語を誰よりも円滑に使うという豊太郎像とも符合する。

念のため、新関の『森鷗外と原田直次郎』からも引用しておく。

『舞姫』において太田に社会復帰の機会を与え、エリスとの仲を引き裂く相澤謙吉の役割を、現実には鷗外が演じていたことになる。こう考えると、『國民之友』誌上の、気取半之丞こと石橋忍月と交わした二度の論争に、鷗外が二度とも「相澤謙吉」のペン・ネームを使ったわけが納得できるのではないか。相澤謙吉は鷗外の親友賀古(かこ)鶴所(つるど)がモデルと一般に考えられているが、それは、太田が主として鷗外その人により造形されている、と想定する先入観によってもたらされたものである。

これを書いていて、ふと私はあることに気が付いた。二人の名前である。並べてみよう。

太田豊太郎

原田直次郎

案外鷗外は初めからかなりわかりやすい形で、読者に真相を提示していたのかもしれない。

書名 : 敦煌

著者 : 井上靖

出版社 :

本文 : (約967字)

時は西暦千年と少々、中国は宋の時代。日本では紫式部の手になる「源氏物語」を、まだ少女であった菅原孝標女が夢中で読みふけていたのが、おおよそ同時代であった。

宋の都である開封では、秀才趙(ちよう)行徳(ぎようとく)が進士の試験を受けていた。筆記試験を優秀な成績で通過し、皇帝の面前で口頭試問を受けるため、順番待ちをしていた行徳は、不覚にも眠りに落ちてしまう。夢の中で皇帝に向かって、宋の西域対策の不備を批判している途中で目が覚めた。もう広場には受験生の姿はなかった。全ての日程が終了してしまったのだった。

行徳が市場をふらふら歩いていると、若い女が殺されそうになっている。彼がその女を助けると、女から文字の書かれた布切れをもらった。何が書いてあるかはわからないが、それが近頃宋の国を脅かしている、西域随一の強大な勢力を誇る西夏の文字であることが判明した。彼は突然この西夏の文字が読みたいと思った。彼は、科挙による登用のチャンスを棒に振ったのも、西夏の女を救い出したのも、女から西夏文字を受け取ったのも、全て自分の運命であると考え、即座に単身で西域に旅立つ。

並大抵のものではない行徳という青年の大胆さと行動力であるが、これはほんの序の口である。もう少し行徳の足跡をたどってみることにしよう。

西域と交流する商人の仲間になり西夏を目指す行徳は、砂漠の真ん中で戦乱に巻き込まれ、西夏に捕らえられる。そのまま西夏の兵士にさせられた行徳は前線部隊に入れられ、西方諸国との戦闘に明け暮れる。

この前線部隊の部隊長は、行徳と同じ漢人であった。彼は、西夏の王から送られてくる命令書が読めなくて困っていた。ある日、行徳が知識人であることを知った部隊長は、行徳に西夏の都である興慶で西夏文字を学んで来るよう命じる。こうして行徳の念願はかなうことになった。

部隊長に気に入られた行徳は、部隊長の右腕となり、西夏の勢力拡大に貢献する。そして、西夏の勢力は、宋の辺境である敦煌をも飲み込もうとしていた。そのとき、行徳は悟った。西夏文字を学びたい一心で、宋の都から西域に旅立ち、はるばる敦煌まで来ることになったのは何のためだったのかを。それは、歴史的にも非常に重要な使命であった。

人は誰もが何らかの使命を持ってこの世に現れる。自分の使命を知る旅を今まさに始め

ようとする高高生にふさわしい書である。

書名 : 風と共に去りぬ

著者 : ミッチェル

出版社 :

本文 : (約761字)

ジョージア州の生んだ世界に名だたる飲み物がコカ・コーラなら、同じくジョージア州の生んだ世界に名だたる名作文学が『風と共に去りぬ』である。コカ・コーラの本社があるアトランタのすぐ南、ジョーンズボロ付近が本書の舞台「タラ」だ。タラは架空の地名だったが、現在は国道41号線の呼び名になっている。

東野圭吾『白夜行』の主人公唐沢雪穂が小学生の頃『風と共に去りぬ』を読みふける場面は、私に鮮烈な印象を残した。私は悲惨な状況に耐えながらこの長い小説を読み続ける雪穂の思いがずっと気になっていたのである。今回ついに本書を読むことができ、この問題に対する自分なりの解答を見出した気がする。

存在感のある女性を二人挙げろと言われたら、一人は当然主人公のスカーレット・オハラだが、もう一人はスカーレットの母エレン・オハラを挙げたい。アメリカ南部の上流貴族に生まれたエレンは恋人を失った悲しみのあまり生きがいをなくし、二十八歳年上の成り上がり者のジェラルドの求婚に応じる。十五歳の時である。女の子らしい夢も青春も故郷も捨てて、ジョージア州奥地のタラにある綿花栽培農家に嫁いだのである。女の子らしい夢も青春も奪われて悲惨な日々を過ごす『白夜行』の雪穂は、きっとエレンに自分を重ねたであろう。エレンはおとなしい美少女である。小学生の雪穂もおとなしい美少女だった。

スカーレットは母と対照的な性格である。華麗で活発、元気で行動的である。火のように激しいといってもいい。南北戦争で全てを失ってもあきらめることはなく、なりふりかまわず金儲けに走り回り、再び栄光を手にしようとする。『白夜行』の雪穂も成人後は華麗で行動的な女性として描かれる。少女時代の過去を封印し、栄光を勝ち取るためには手段を選ばない。両作品はどちらも長編だが、面白いのでぜひ読み比べてほしい。

書名 : ワーズワス詩集

著者 : ワーズワス

出版社 :

本文 : (約1008字)

イギリスの景観はたいてい美しいが、ことに湖水地方の景観は見事である。湖水地方で一番大きなウィンダミア湖を三十分ほどクルーズしたことがある。船が出るまでボウネスの街を眺めていた。法律的な規制もあるのだろうが、街並みのトーンがそろっていて、ため息が出るほど美しい。派手な看板や電飾などで他との違いを際立たせようとするのではなく、素材や形状やデザインなどを街の人々が響き合わせ、街全体を際立たせているのである。パソコンが変換してくれないような小さな街「ボウネス」ですらこんなに美しいのである。クルーズが終わるとアンブルサイドで船を下り、周辺を観光した。グラスミアにはワーズワース(今回紹介する本ではワーズワスとなっているが、私はワーズワースの方がなじんでいるのでこちらを使う)の住居がある。ワーズワースが若い頃に住んだダブ・コテージや晩年までを過ごしたライダルマウントは、小さな湖ライダルウォーターの付近にあった。どちらも落ち着いた白い建物で、ワーズワースが住んでいた頃の状態が保存されていた。

ウィンダミア湖の西にある小さな湖エススウェイトウォーター湖畔のニア・ソーリーという小さな村にある、ヒルトップ農場。広い牧場に羊が群れていた。ビアトリクス・ポターが農場経営をしながら絵本制作をした住居はとても質素だった。ポターは動物の絵を描いた手紙を知人の子供にあてて出していたが、それが評判になり出版の運びとなった。こうしてピーターラビットが世に出た。ピーターラビットで安定した収入を得たポターは、愛する湖水地方の土地を買い上げ、そこで晩年を過ごした。そして湖水地方の美しさが自分の死後も損なわれることがないようにと、その土地の管理をナショナル・トラストに託したのである。

ワーズワースとポターに愛された湖水地方はこれからも開発されることなく残っていくだろう。この地方の自然を歌いあげたワーズワースの詩とともに。私もだんだん年を取って

きたせいか、面白おかしい展開の作り話にはあまり興味を持ってなくなっている。人間の作ったものよりも、そのままの自然を描き出したものの方に関心が移ってきたのである。若い頃はワーズワースの詩などすぐにあきて放り投げてしまった。しかし、今は何度読んでも飽きないのである。ワーズワースは人間も自然の一部と考えている。過ちを犯して不幸になった娘などが湖水地方の情景と溶け込むように描かれるのはそのためであろう。

書名 : 五重塔

著者 : 幸田露伴

出版社 :

本文 : (約944字)

腕はいいのだが、世渡りが下手で、貧乏暮らしの「のっそり十兵衛」が主人公だ。十兵衛だって、晴れがましい仕事を望んでないわけではない。あるとき谷中の感応寺に五重塔を建てる話が持ち上がった。十兵衛の親方の源太が請け負うことに決まったが、自分が建てたいという思いをあきらめきれない十兵衛は、寺の上人に直談判に行く。十兵衛の腕のよさを知った上人は、五重塔の施工者を源太から十兵衛に変更する。源太は当然のことながら納得できない。源太の妻も納得できない。源太の子分も納得できない。そして騒動が起こる。

十兵衛は生真面目で完璧な仕事をする大工であるが、頑固で融通がきかない。十兵衛が直談判したあと、源太が情理を尽くして、自分と共同作業するのはどうかと譲歩を促すが、彼は首を縦に振らない。共同作業するのなら、願いは取り下げたいとまで言い出す。結局源太は根負けしてしまう。源太は度量の広い親方だ。こんなことがあってもまだ十兵衛を応援しようと思ひ、自分が作った資料を気前よく貸してあげようとする。社交辞令の一つも言ってそつなくやればいいのに、十兵衛にはそんな器用なまねはできない。彼はにべもなく辞退するだけだった。これにはさすがの源太もカチンときた。このやりとりが、騒動の原因となった。騒動の結果、十兵衛の仕事は最大のピンチを迎える。果たして無事に五重塔は完成するのだろうか。

十兵衛も譲るところは人に譲るといふそつのない人間ならば、もっと人々と円滑にやれ

るのだろうが、彼の言動はどうも周りとは噛み合わない。悪気はないのだが、如才なくできないのである。それでいつも損ばかりして、よい仕事も回ってこず、暮らし向きもよくならない。組織ではとても働けない人であるが、しかし、よくよく考えてみると、人類を発展に導いたのは、十兵衛のような人ばかりだったのかもしれない。知識や技術があまりにも高い水準なので、他の人がついていけない。また、時代の一步先を行く斬新な理論なので、社会通念からはみ出してしまう。火の使用、文字の使用、農耕、牧畜、機械の発明、ロケット、コンピュータ、インターネット、……。最初に考えた人は、みんな孤独な天才だっただろう。彼らの偉大な業績に対する見返りは、きっとわずかだったか、もっとひどいものだっただろう。

書名 : 少将滋幹の母

著者 : 谷崎潤一郎

出版社 :

本文 : (約829字)

時平というまったくいいイメージがない。学問もろくにできない時平が、家柄の力を背景に、優れた学者の道真を屈服させた。人々から慕われた道真は太宰府に下り、世を恨みながら生涯を終えた。その後、道真の怨念が都を襲い、それを鎮めるために北野天満宮が建てられた。道真は常に悲劇の英雄で、時平は常に悪の枢軸なのである。

谷崎の見方は違っていた。道真はたしかに学者だが、政治における実際の力には疑問があるというのである。たしかに優れた学者とか芸術家とかいうものは世の中の運営には不向きである傾向が強い。一方、学問に不向きな時平は、世の中の運営には才覚を示した。また、世間で言われるほどいやな奴ではなく、むしろ人間味があって、男振りなどもなかなかよく、実に愛すべき人物であったと谷崎は言う。政治的手腕を語る次の話なども、世間一般の時平像を変更せしむる材料になりうるだろう。

世間がぜいたくな風潮になってきたときのこと、時平が大変華美な衣装で参内した。帝はそれを見て激怒し、時平に退出を命じた。一ヶ月の自宅謹慎である。以来、世間のぜいたくはぴたっと収まった。という話だが、実はこれは、時平が帝と結託して打った芝居だったの

である。時平は、政策的な効力を優先するためには、悪役に徹することもできる度量があったのである。

谷崎の筆は、ここまでは時平を持ち上げたかに見えたが、まだ筆も乾かぬうちに、今度は悪行の暴露へと急速転回する。悪行とは、伯父の国経の妻を拉致したことである。国経は七十過ぎて二十歳ほどの妻を迎えた。これが滋幹の母である。大変な美女であった。この美女を堂々と拉致する。一子設ける。敦忠である。しかし、ほどなく時平は病没する。時平一族はみな不幸な末路をたどる。道真のたたきだと世間は大いに騒ぐ。不幸に見舞われなかったのは、時平の次男の顕忠の家系だけだった。顕忠がきわめて質素・儉約の人だったためらしい。

滋幹は突然消えた母を探し求める。果たして母に会うことはできるのだろうか。

書名 : 山の音

著者 : 川端康成

出版社 :

本文 : (約879字)

全ての小説は推理小説である。殺人事件を解決する探偵物を特殊推理小説と呼び、普通の小説を一般推理小説と呼ぶ。もちろんうそである。しかし、全ての小説にはたいてい謎があり、そして、その謎を解決しようとする者が登場する。全ての小説の主人公は謎を解決しようとする者か、謎に巻き込まれる者か、その両方かである。

小説には必ず事件が起こる。それを主人公を中心とした登場人物が解決していく。だから、読んでいる人は、この先どうなるんだろうとワクワクする。謎がなければ読むのをやめるし、謎が解明されなければ、読んで損したと思う。難しすぎる謎だとなついていけないし、簡単すぎる謎だと馬鹿にしたくなる。芥川龍之介の『羅生門』が今でもあれだけ高校一年生の心をとらえるのは、謎が強烈で、解明が腑に落ちるからである。解明されるだけでなく、ラストシーンで謎がまた残される。これがまたいいのである。謎は全部解明されないのがいい。

謎の質の高さと解明の巧みさと謎の残り具合の絶妙さで優れた作家は多いが、そういう

観点で私がすぐに思い付くのは川端康成である。川端の謎は、カフカや安部公房や大江健三郎のように、いかにも謎な話でないところがとてもよい。

二つの謎に悩む尾形信吾が主人公である。息子夫婦の関係がうまくいってないのではないか。これが一つ目の悩みである。息子にはどうやら愛人ができたようである。こう推理した信吾は息子の行動を調査するのである。信吾は息子と同じ会社に通っている。信吾の部屋には秘書がいる。この秘書が息子の愛人かとはじめは思うが、そう思わせる息子のカムフラージュだと見抜き、秘書を問いただす。秘書の口から真相が明らかになる。

もう一つの悩みは娘が夫と不仲で実家に戻ってきたことである。信吾は会社の部下を使って娘の夫の動静を探らせる。しかも、娘にはそのことを全く悟らせない。信吾はなかなかの探偵である。しかも、人を使うのがうまい。実家に戻った娘の様子は詳しく書かれるが、この信吾の行動は読者にも全くわからないのである。『古都』を読んだときも思ったが、川端康成は推理作家としても相当の腕である。

書名 : 忠直卿行状記

著者 : 菊池寛

出版社 :

本文 : (約1001字)

松平忠直は越前藩主である。徳川家康の孫であり、徳川家光の従兄であり、水戸黄門で有名な水戸光圀の従兄でもある。

忠直は大坂夏の陣で活躍したが、論功行賞に不満を持ち、以来幕府に反抗的な姿勢を取った。家臣との確執が絶えず、乱行が重なり、最後は幕府から隠居を命じられ、大分に移された。

その忠直卿の乱行の原因を明らかにし、彼の複雑な心理を分析的に描き、さらに権力者の孤独に迫ったのが本書である。

森鷗外の『心頭語』に地位が高い人は真の友人を持つことが難しいとあるが、蓋し忠直の孤独はこの類いであろう。

ドラマチックな話になるように、史実とは異なる要素もかなり盛り込まれているので、これはこれで、一つのドラマとして楽しむのがよいであろう。

さて、それでは、本書についてもう少し具体的な紹介に入ってみることにしよう。

忠直は文武に優れる若き藩主である。

剣術においても彼の右に出るものはなかった。

彼は城内の剣術試合において常に勝者であった。

彼は自信家でもあり、プライドも強かった。

そんな彼が、ある日家臣たちの内緒話を偶然耳にした。家臣たちは剣術試合で藩主にわざと負けていると口にする。この言葉は彼を怒らせると同時に悲しくさせた。

翌日彼は剣術試合を木刀ではなく真剣でやろうと言いだす。家臣たちは考え直すように説得するが、彼の決意は固い。

この剣術試合の結果がどうなるのかは本書を読んでじかに知ってほしい。

忠直は剣術だけではなく、すべての方面において周囲の者たちが自分を恐れ、遠慮しているのではないかと思い、何もかもが味気なく感じられてくる。友情も愛情もうそっぱちにしか思えなくなっていく。このような心理状態になった忠直が、隠居を命じられるまでの乱行ぶりは、本から目を離せなくなるほど凄まじい。

女性の愛が信じられなくなり、乱行を重ねる王様の話では、『千夜一夜物語』が最も有名であろう。王は毎日一人の女性と婚姻し、朝を迎える前に新婦の命を奪う。ある夜、王の残酷な行為をやめさせようと、自ら花嫁になることを志願した聡明な女性がいる。シェヘラザードである。いったいどうやって王を止めようというのか。彼女は最初の夜、王の寝室でおとぎ話をした。その話がおもしろいので、王はシェヘラザードをなかなか殺すことができない。朝になっても話が終わらないので、もう一晩生かして、話をさせることにした。そして、シェヘラザードの話はとうとう千夜続いたのである。

書名 : ハックルベリイ・フィンの冒険

著者 : トウェイン

物語の冒頭にもいろいろあるが、作者がその物語自体の存在意義や価値を読者に疑わせるような書き方をしている、しかも、その書き方がおもしろくて笑いを催すという類いのもので、本書に匹敵するのはセルバンテスの『ドン・キホーテ』しか読んだことがない。紀貫

之の『土佐日記』にもこんな意味のない日記は破り捨ててしまおうという箇所があるが、あれは冒頭ではなく結末である。

スタンダード、ディケンズのスピード感ある展開、セルバンテス、バルザックの複雑な人間模様と意外な展開、フォークナーのカメラ的視点、これら欧米の文豪たちの手法はハリウッド映画の源流であろう。そして、本書を書いたトウェインの手法もハリウッド映画に息づいている。

スパイ映画や刑事物などによくある場面だが、Aという人物がBになりすますために、ありとあらゆる手段でBに関する情報を入手して、ある作戦を実行する。視聴者はこういった場面にハラハラドキドキしながら釘付けになる。まさにハリウッド映画を特徴づける手法の一つだが、本書は始めから終わりまでこういった場面の連続である。

ハックルベリイ・フィンが父親から虐待を受ける毎日から抜け出そうと思った。父親の留守に仕掛けを施したある日、ハックは一人でカヌーを漕いでミシシッピ川を下った。父親を初め町の人々はハックが盗賊に殺されたと考えた。彼の仕掛けはそれほど巧妙だった。

途中で知り合いの黒人、ジムと遭遇する。ジムはやむを得ない理由で逃亡奴隷になっていた。当時のアメリカでは、奴隷が逃亡することは重罪だった。ジムはもう町には戻れない。ハックももう町には戻れない。二人はその点で似た者同士だった。そこでハックはジムと一緒に旅をすることにした。二人は大きな筏を作り、誰にも見つからないように、夜にミシシッピ川を下り、昼は木の陰に筏を隠した。食べるものはミシシッピ川で釣った魚。しかし、パンやコーヒー、その他の生活用品も必要だ。そのため、彼らはしばしば沿岸の町に立ち寄ることになる。かなり警戒して町の人たちと接触するが、きわどい場面になることも多い。それをその都度二人は頭を使って切り抜ける。

しかし、あるとき、ハックが筏に戻ると、ジムがいなくなっていた。悪い奴らに売られてしまったのだ。ハックはジムを救出するため行動を開始する。

毎日筏に乗ってミシシッピ川を下るハックとジムの暮らしが実にうらやましい。静かで暗い夜を水の流れに任せてどこまでも下っていく。食事は魚のフライとパンとコーヒー。揚げた魚をハックとジムが実においしそうに食べていたのが妙に頭に残る。あり合わせのもので、考え方と工夫次第で、素晴らしいものになりうるのだと、二人を見ていて思わずにいられない。

書名 : 檸檬

著者 : 梶井基次郎

ハックとジムがミシシッピ川をあてどなくさすらう『ハックルベリイ・フィンの冒険』を前回紹介したとき、「あり合わせのものでも、考え方と工夫次第で、すばらしいものになりうるのだと、二人を見ていて思わずにいられない」と書いたが、本書『檸檬』の主人公もあり合わせのものをすばらしいものに変える天才だ。

感覚を快くしてくれるものを彼はいつも求めている。彼は、視覚・聴覚・触覚・……、あらゆる感覚を快くしてくれるものを求めるが、共通するのはそれらは決して高価なものでも華麗なものでもないということである。お金を出さなくてもたやすく得られるものばかりなのだ。視覚や嗅覚、触覚などの感覚を総動員し、檸檬に込められた強力な威力を読者に実感させる喚起力は類を見ない。

『橡の花』という作品では、耳に入る音がいろいろ出てくる。音自体はごくありふれたものだ。鉛筆を削る音、紙に鉛筆で文字を書く音。電車の音。こんなありふれた音なのに、どうして梶井が書くと、魅力的になるのだろうか。梶井の文章は小説ではない。音楽である。

『檸檬』では、なんといっても色だ。といっても、豪華なものなど何一つない。おはじき、ねずみ花火、野菜。そんなものばかりだ。これらを梶井は文章で名画に変える。梶井の文章は小説ではない。絵である。

梶井基次郎は映画が好きだった。だから、梶井の小説は映画でもある。花火やおはじきなど「私」を慰める美しいものを次々に提示し、檸檬につなげていく展開や、暗い街角から明るい店先に視点を移動し、最後に檸檬をクローズアップする映画的な手法を読み味わいたい。丸善で本を高く積んでその上に檸檬を乗せるという行為は理解に苦しむが、憂鬱を解消するために、空想の中で丸善を檸檬爆弾で木っ端微塵にしようとしたと考えれば、納得できないこともない。彼は当時結核に苦しめられていた。そして、まもなく若くしてこの世を去るのである。そんな彼の空想の中だけのテロ行為なのだから、ここは大目に見てやりたい。彼の空想上のテロは『檸檬』だけではない。『冬の日』のテロはもっと大規模で、過激である。まず彼は球状に水素を充填した空間の中に東京を包み込み、これを空高く浮かせる。そして、……。続きは『冬の日』を読んでほしい。

あり合わせのものも、考え方と工夫次第で、すばらしいものになりうる。そのためには、感覚を研ぎ澄ますことが重要なのだと、梶井の文章を読んでいて思う。彼のようにものをじっくり見たり聴いたりしてみようかと思ったりする。

闇からクローズアップされる『檸檬』もいいが、闇から浮き出るものを丹念に描いた『闇の絵巻』もいい。百遍読んでもきっと味わい深く読めるだろうと思うほどだ。これは、言葉で演奏された「ジムノペディ」だ。